

# Development of Course Guidance Support Method for "Competency-Based Education (CBE)" in University and its Issues

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松元, 英理子, 高松, 邦彦, 坊垣, 美也子, 今西, 麻樹子, 関, 雅幸, 中田, 康夫, MATSUMOTO, Eriko, TAKAMATSU, Kunihiko, BOHGAKI, Miyako, IMANISHI, Akiko, SEKI, Masayuki, NAKATA, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.20608/00001037">https://doi.org/10.20608/00001037</a>

## 原著

# 大学教育における「コンピテンシー」に基づく 履修指導（支援）方法の構築・実践と課題 ～アクション・リサーチによる実践的教育研究～

松元 英理子<sup>1)2)</sup> 高松 邦彦<sup>2)3)4)5)</sup> 坊垣 美也子<sup>1)</sup>  
今西 麻樹子<sup>1)</sup> 関 雅幸<sup>1)</sup> 中田 康夫<sup>2)6)</sup>

## Development of Course Guidance Support Method for “Competency-Based Education (CBE)” in University and its Issues

Eriko MATSUMOTO<sup>1)2)</sup>, Kunihiro TAKAMATSU<sup>2)3)4)5)</sup>, Miyako BOHGAKE<sup>1)</sup>,  
Akiko IMANISHI<sup>1)</sup>, Masayuki SEKI<sup>1)</sup>, and Yasuo NAKATA<sup>2)6)</sup>

### 要旨

コンピテンシーに基づく履修指導（支援）の構築を目的とし、2017年度前期・後期の履修登録期間中に学生20名を対象にチューター教員による面談指導（支援）を行った。指導（支援）用資料として「各学生のコンピテンシー自己評価レーダーチャート・自記式」と、シラバス記載の「評価方法と評価項目との関係」のデータから算出した「各学生の登録科目全体で獲得できるコンピテンシーのレーダーチャート・Web式」「基盤教育分野40科目の関連性を2次元上に可視化した図」を作成した。これらを活用し、学生が苦手な部分を伸ばすのか、得意な部分を伸ばすのか、そのためにどの科目を履修すれば良いかなどについて履修指導（支援）を行った。履修登録は学生の判断にゆだねたが、本法による履修指導（支援）が、学生に対しコンピテンシーを意識した学修への動機づけができたことが明らかになった。一方、それらを成し得るための教学面での改善点もいくつか浮かび上がった。

キーワード：コンピテンシーに基づく教育、ときわコンピテンシー、履修指導（支援）、アクション・リサーチ

### Abstract

While competency-based education has become a popular topic in the field of higher education, it has only recently been introduced in most Japanese universities. Kobe Tokiwa

1) 保健科学部医療検査学科 2) ときわ教育推進機構 3) KTU 研究開発推進センター 4) ライフサイエンス研究センター  
5) 教育学部こども教育学科 6) 保健科学部看護学科

University is currently undergoing reforms—one of which is competency-based education. Our university has developed a common evaluation indicator called “Tokiwa competencies” that students can acquire through regular, quasi-regular (or remedial), and extra-curricular (or club) activities. This article describes the prototype of competency-based education in Kobe Tokiwa University and how it was developed through action research.

Introducing our own efforts to effectively conduct competency-based education, this article details the prototype of lecture-select-coaching through a combination of competency-based education and a web-based support system that enables students to select courses using Tokiwa competencies. The Web-based Radar Chart System of Tokiwa Competencies facilitates a new way to visualize curricula using Tokiwa competencies through a combination of cosine similarity, multidimensional scaling methods (MDS), and scatter plotting. We conclude that it is important that students can reflect on and interpret Tokiwa competencies for themselves.

Key words: Competency-Based Education (CBE), Tokiwa competency, course registration guidance, action research

## 緒言

2008年12月に中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」<sup>1)</sup>が公表され、日本の大学は教育の質を保証する方向へと大きく舵を切った。質を保証するためには、学生が卒業までにどのような能力を身につけたのか、学修成果をきちんと把握することが重要となる<sup>2)</sup>。学位授与の方針に関しては、抽象的な教育研究上の目的を掲げるに止まるのではなく、「学習<sup>註1)</sup>成果」重視の観点から、卒業までに学生がどのような能力を修得することを目指すかを、できるだけ具体的に示していくことが大切である。大学が掲げる「学習成果」は、「21世紀型市民」として自立した行動ができるような、幅の広さや深さを持つものとして設定することが重要である<sup>1)</sup>。そして、当該大学の教育研究上の目的等に即して、いかにすれば、専攻分野の学習を通して、学生が「学習成果」を獲得できるかという観点に立って、教育課程の体系化・構造化に向けた取組を進めていくことが課題となる<sup>1)</sup>。このような学修成果を重視した高等教育改革が国際的にも顕著に

なった背景には、高等教育、とりわけ学士課程教育についての枠組の大変換、いわば「パラダイム転換」が生じていたことが挙げられる。それは「教育パラダイム」から「学習パラダイム」へのシフトである<sup>3)</sup>。

2017年に公示された「新学習指導要領」では、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」の視点から、教育課程の理念や、新しい時代に求められる資質・能力の在り方、アクティブラーニングの考え方等について、わかりやすく示すものとして抜本的に改善されている<sup>4)</sup>。つまり、これからの大学改革の方向性は、従来の「(教員が)何を教えるか」から「(学生が)何を学んだか/何ができるようになったか」が極めて重要な焦点であるかが理解できる。すなわち、この「教授パラダイム」から「学習パラダイム」への転換<sup>5-6)</sup>をいかに進めることができるかが、大学改革の成否を握っているといっても過言ではない。

昨今、世界各国において、今日的に育成すべき人材像をめぐる、断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力をコンピテンシーとして定義し、それをもとに目標を設定し、政策をデザイン

する動きが広がっている。大学の名前や学部の名称だけで、大学において学生が何を学んだのかを推測するのではなく、学生がコンピテンシーを修得することが学生の大学修学のアウトカムとなれば、学生も授業時間をより有効に、学びたいこと、就職やキャリアの役に立つこと、または、今後の人生を生き抜く上で必要であると考えられることに学ぶエネルギーを集中して費やすことができるようになり、雇用先も、学生が何を修得したのかがより明確にわかるようになり、雇用後の研修がより効率的になるのではないだろうか<sup>7)</sup>。

2017年度、神戸常盤大学では全学的な教学マネジメント改革の方向性を決める大きな決定が相次いでなされた。具体的には、①建学の精神のもと、知性と感性を備えた専門職業人の育成を目的とした全学的な「ときわ教育目標」の策定、②「全学アドミッション・ポリシー (AP)」「全学カリキュラム・ポリシー (CP)」「全学ディプロマ・ポリシー (DP)」「全学スチューデント・サポート・ポリシー (SSP)」「全学アセスメント・ポリシー (ASP)」の5つの全学ポリシーの整備<sup>8)</sup>、ならびに③学科横断的な「基盤教育分野」のカリキュラム作成である<sup>9)</sup>。本学におけるこの改革はもちろん、上記の「学士課程教育の構築に向けて」に基づいて行われた。

「ときわ教育目標」には、学生一人ひとりが修得を目指すものとして「ときわコンピテンシー」が掲げられた。ここで初めて本学においてコンピテンシーを掲げた理由は、上記のようにコンピテンシーに基づく教育 (Competency-Based Education: 以下、CBE) 改革は世界的な潮流となっており、teaching (教授) から leaning (学習) へとパラダイムを転換する学びのイノベーションが推進される状況がみられるから<sup>10)</sup> であり、当然のことながら上記の「学修成果の可視化」を意識してのことである。この「ときわコンピテンシー」は「知識」「思考力」「創造力」「市民性」の4つの力からなるものであるが、さらに教養・専門力・論理的思考力・知欲などの19の諸能力で構成されている (表1)<sup>8)</sup>。

2018年度から開始された新しい「基盤教育分野」カリキュラムは、「ときわコンピテンシー」の修得を目指して設計されたものであり、本学のこれまでの「教養分野」カリキュラムと比較して選択肢も大きく広がった。このため、学生が基盤教育分野の各科目の到達目標を理解して履修選択時の参考とするために、初年度から基盤科目のシラバスには「関連ときわコンピテンシー」「評価項目 (関連するときわコンピテンシー)」「(評価項目ごとの) 評価方法と評価割合」が記載されている。しかし、入学当初の学生がシラバスの記載事項を理解し、自主的に履修科目を選択することには困難を伴うと予想され、教員による何らかの履修指導 (支援) が必要になると考えられた。

大学におけるCBEは、1990年頃から国外の医療教育の分野で、アウトカムベースの教育という名前で実践されてきている<sup>11)</sup>。一方、わが国の大学教育においては、コンピテンシーを明記している大学<sup>12)14)</sup>も徐々にみられるようになってきているが、コンピテンシーに基づきシラバスを作成している大学やそれに基づく履修指導 (支援)、さらには上記に関する研究はほとんどみられず、緒に就いたばかりである。

本研究は、わが国の大学教育におけるCBEの推進に資するために、本学の学生が基盤教育分野の各科目で修得できる「ときわコンピテンシー」を意識した履修指導 (支援) 方法の開発過程を明示するとともに、本法を活用して実践した履修指導 (支援) の経験から、わが国においてCBEを推進するための課題を明らかにすることを目的とする。

## 方法

本研究では、履修指導 (支援) を行う教員側の視点としての「コンピテンシー」に基づく履修指導 (支援) 方法の構築と実践、ならびに履修指導 (支援) を受ける学生側の視点の2つの視点からなる。

表1 19のときわコンピテンシー

教養	多様な人と関わることのできる人間性の基盤として教養を身につけている
常識力	社会の一員として知っておくべき知識・振る舞いを身につけている
専門力	各専門職の実務遂行に必要な知識・技能を身につけている
情報力	思考や判断に必要な情報を収集・整理・分析し、活用することができる
論理的思考力	根拠に基づき、論理的に考えることができる
批判的思考力	物事を多角的・批判的に捉え、考えることができる
知欲	学ぶこと・知ること、楽しさと悦びを覚えることができる
探究力	物事のあり方について深く考え、その本質を見極めようとするすることができる
継続力	学び、考え、行動する姿勢とその努力を持続することができる
自己管理能力	自ら、心身の健康を適切に管理することができる
省察力	自己の思考や行動を振り返り、改善の道を常に模索することができる
デザイン力	様々な考えや知識を総合して課題の解決策をデザインすることができる
表現力	想いや考えを表現し、他者に伝えることができる
判断力	情報や思考に基づき、状況に対して適切な判断をすることができる
実行力	失敗を恐れず、想いや考えを具体的な行動にすることができる
責任感	社会の一員としての責任をもって物事に臨むことができる
貢献力	誰かの役に立つことに悦びを感じ、具体的に行動することができる
傾聴力・対話力	他者の声に耳を傾け、創造的な対話をすることができる
協調性・協働力	自他の利害をこえて、協力して物事に取り組むことができる

1. 履修指導（支援）を行う教員側の視点：「コンピテンシー」に基づく履修指導（支援）方法の構築と実践

教授学習パラダイムの転換と大学教育改革が進むなか、大学教育研究として、多くの実践研究が積み重ねられてきている。そうした実践研究は、実践者がうまく実践するための知としての「実践知」<sup>15)</sup>を生み出す研究であり、実践というアクションとリサーチを平行して進めるという点で、アクション・リサーチとして捉えることができる<sup>16)</sup>。そして、アクション・リサーチは、当事者または当事者グ

ループが、“計画－実行－評価”サイクルの螺旋過程を通して単一事例の診断を行いながら、事態の改善を図っていく方法を採用<sup>17)</sup>。つまり、このサイクルを繰り返すたびに行われる実行と効果のモニター（分析）、失敗と効果の明確化により初期のアイデアや計画は修正され、そこで問題解決に至る方法や問題解決を阻害する要因も発見されていく<sup>18)</sup>という過程である。これを、実践の改善方法として昨今各分野でとりわけ注目されているリフレクションの観点からまとめ直すと、新しい取組の実践（経験:Experience）→リフレクション（Reflection）

→改善した取組の実践 (Action) という ERA サイクル<sup>19)</sup>ということもできる。近年、アクション・リサーチは高等教育研究の方法論として有望なものと位置づけられている<sup>20)</sup>。Schmuck<sup>21)</sup>は、アクション・リサーチを、トライ&エラーの Proactive 型と調査を先行する Responsive 型にわけている。そこで本研究では、Proactive 型のアクション・リサーチの方法を採ることにした。

本研究における Proactive 型のアクション・リサーチでは、「問題への取り組み方を考える」「それを実行する」「結果を評価する」「将来の実践を修正する」というアクション・リサーチに取り組む際のガイド<sup>20)</sup>をもとに、「1.『ときわコンピテンシー』に基づく履修指導 (支援) のための支援システムの構築」「2. 2017 年度前期の履修登録期間における『1.』を活用した履修指導 (支援) の実施」「3. 2017 年度前期の履修登録期間後の『2.』の評価とそれに基づく履修指導 (支援) 方法の改善」「4.『3.』に基づく 2017 年度後期の履修登録期間における『1.』を活用した履修指導 (支援) の実施」「5. 2017 年度後期の履修登録期間後の『4.』の評価」という 5 つの段階を経た。

なお、コンピテンシーに基づく履修指導 (支援) を実践した者は、本取組に賛同の得られた本学保健科学部医療検査学科教員 5 名であった。この 5 名の教員がチューターとして担当する学生 (20 名) のうち、同意の得られた学生を対象に、結果の項に示す方法で履修指導 (支援) を実践した。

## 2. 履修指導 (支援) を受ける学生側の視点: 指導 (支援) を受けた学生に対する質問紙調査

履修指導 (支援) を受ける学生側の視点からの評価として、以下の 6 問からなる質問紙調査を実施した。

問 1: あなたは、ときわコンピテンシーがどのようなものか理解できましたか? (全く理解できなかった、少し理解できなかった、少し理解できた、とても理解できた)。

問 2: 上記で「全く理解できなかった」「少し理

解できなかった」と回答された方、何 (どのようなところ) が理解できなかったのか教えてください。

問 3: どのようにすれば、来年度以降、学生の皆さんが、よりときわコンピテンシーについて理解できるようになると思いますか?

問 4: 前期に履修ガイダンスの際の面談で、履修を変更したいと思いましたが? いずれかに○印をつけたうえで、その理由について [ ] 内にご回答ください。(思わなかった、思った)。

問 5: 前期の履修ガイダンスの際の面談で、履修を変更しましたか? いずれかに○印をつけたうえで、その理由について [ ] 内にご回答ください。(変更しなかった、変更した)。

問 6: 後期の履修登録時に、コンピテンシーをもとに、履修科目を検討してみようと思いませんか? いずれかに○印をつけたうえで、その理由について [ ] 内にご回答ください。(検討してみようとは思わない、検討してみようと思う)。

## 結果

### 1. 履修指導 (支援) を行う教員側の視点: 「コンピテンシー」に基づく履修指導 (支援) 方法の構築と実践

#### 1) 「ときわコンピテンシー」に基づく履修指導 (支援) のための支援システムの構築

##### (1) 履修科目選択の判断を支援するための Web ベースの支援システムの開発

学生は通常授業内容に基づいて履修科目を選択するが、「ときわコンピテンシー」に基づく履修指導 (支援) のためには、コンピテンシーを意識した科目選択ができるようなシステムが必要であると考えた。そこでまず、基盤教育の各科目と「ときわコンピテンシー」の関係を示した表 2 を作成したうえで、学生が履修科目選択の際に理想的に獲得できるコンピテンシーを計算してレーダーチャートに

表示させる Web ベースのシステムを開発した<sup>22)</sup>。

具体的な手順を図1に示した。具体的には、学生は web 上に用意した図2の画面から選択を考えて

いる基盤教育科目を選択（チェック）して submit ボタンを押す。すると、図3のようにレーダーチャートが自動的に描出される。

表2 基盤教育科目と「ときわコンピテンシー」の関係（一部のみの抜粋）

	ときわコンピテンシー																					
	教養	常識力	専門力	情報力	思考力	論理的	批判的	知欲	探究力	継続力	管理能力	自己	省察力	デザイン力	表現力	判断力	実行力	責任感	貢献力	対話力	傾聴力	協働性
まなぶる?ときわびとI	0	0	0	0	0	0	0	20	0	10	25	10	15	0	0	0	0	0	0	0	0	20
まなぶる?ときわびとII	0	0	0	0	0	0	0	20	0	10	25	10	15	0	0	0	0	0	0	0	0	20
大学道場miniゼミA	0	0	0	0	0	0	25	35	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0
大学道場miniゼミB	0	0	0	0	0	0	25	35	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	0
超ときわびと	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	40	15	0	0	0	10	10	5	0	0	0	20

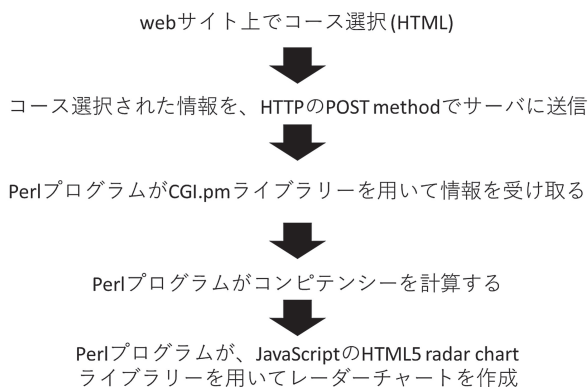


図1 ICT 支援システム：学生が科目選択の際、理想的に獲得できるコンピテンシーを計算してレーダーチャートに表示させる Web ベースのシステムの流れ

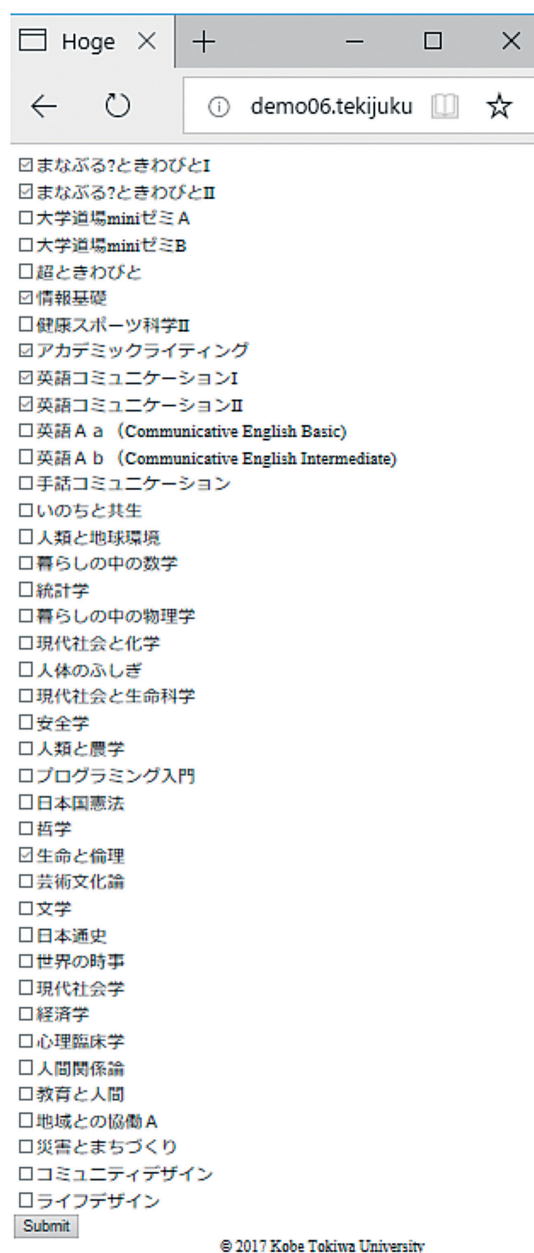


図2 ICT 支援システムのトップページ：画面から選択を考えている基盤教育科目を選択（チェック）する

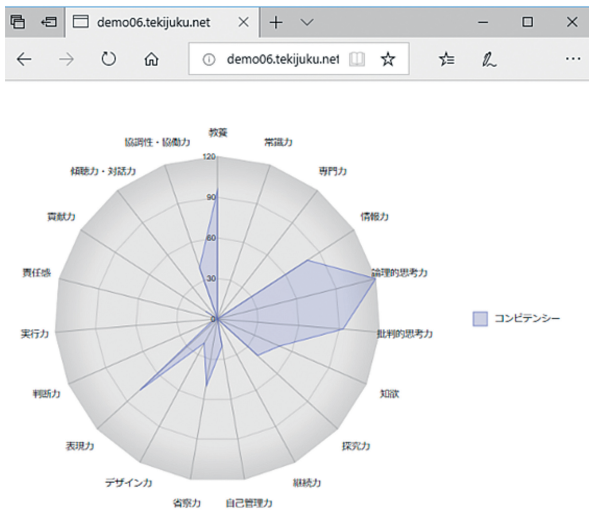


図3 図2で入力した結果の例：「まなぶる▶ときわびとI」「まなぶる▶ときわびとII」「情報基礎」「アカデミックライティング」「英語コミュニケーションI」「英語コミュニケーションII」「生命と倫理」を選択した場合の「ときわコンピテンシー」を合計したレーダーチャート

(2) コサイン類似度、多次元スケーリング手法 (MDS)、および散布図の組み合わせによるときわコンピテンシーを使用してカリキュラムを可視化する新しい方法

次に、コサイン類似度、多次元スケーリング法 (Multi-Dimensional Scaling method、以下 MDS)、散布図を組み合わせ、コンピテンシーを使って、基盤教育の各科目間の関連性を各科目の「ときわコンピテンシー」に基づき可視化する新しい方法を開発した<sup>23)</sup>。コサイン類似度は、ドキュメント間の差異を測定するために使用でき、次のように定義される。

$$\cos(\vec{a}, \vec{b}) := \frac{\vec{a} \cdot \vec{b}}{|\vec{a}| |\vec{b}|} = \frac{\sum_{i=1}^{|\vec{a}|} a_i b_i}{\sqrt{\sum_{i=1}^{|\vec{a}|} a_i^2} \cdot \sqrt{\sum_{i=1}^{|\vec{b}|} b_i^2}}$$

本稿の前に、同じ方法でシラバスを使用したレポートを発表し、シラバスを使用するよりもコンピテンシーを使用するほうが有益であることを証明した<sup>24)</sup>。コンピテンシーを使ったこのカリキュラムの新しい可視化は、履修科目選択の際の新しい視点を学生に提供する。

本稿では、方法論の詳細な説明は省略するが、端的に述べるならば、科目は 19 次元のベクトルとみなすことができる。コサイン類似度を用いて、2 つの科目間のコサイン類似度全体を計算することができる。MDS を適用するために、コサイン類似度を距離で置き換えた。すなわち、MDS の距離などの  $1 - (\text{コサイン類似度})$  である。このデータにより、2 次元で情報をプロットすることができた (図 4)<sup>23)</sup>。x 軸と y 軸は MDS で定義されている。MDS の x 軸と y 軸は、主成分分析の第 1 主成分と第 2 主成分にそれぞれ類似している。図 4 のドット 1 ~ 40 は 40 科目の基盤科目に対応し、2 次上距離の近いドット (科目) は、ときわコンピテンシーの分布が似ていることを表している。

ドットと科目の対応は、1 まなぶる▶ときわびと I、2 まなぶる▶ときわびと II、3 大学道場 mini ゼミ A、4 大学道場 mini ゼミ B、5 超ときわびと、6 情報基礎、7 健康スポーツ科学 II、8 アカデミックライティング、9 英語コミュニケーション I、10 英語コミュニケーション II、11 英語 A a (Communicative English Basic)、12 英語 A b (Communicative English Intermediate)、13 手話コミュニケーション、14 いのちと共生、15 人類と地球環境、16 暮らしの中の数学、17 統計学、18 暮らしの中の物理学、19 現代社会と化学、20 人体のふしぎ、21 現代社会と生命科学、22 安全学、23 人類と農学、24 プログラミング入門、25 日本国憲法、26 哲学、27 生命と倫理、28 芸術文化論、29 文学、30 日本通史、31 世界の時事、32 現代社会学、33 経済学、34 心理臨床学、35 人間関係論、36 教育と人間、37 地域との協働 A、38 災害とまちづくり、39 コミュニティデザイン、40 ライフデザインである。

2) 2017 年度前期の履修登録期間における「1)」を活用した履修指導 (支援) の実施

前期の履修登録期間中に、上述のように教員 5 名がチューターとして担当している学生に対し、「と



きわコンピテンシー」に基づく履修指導（支援）を実施した。

まず学生に、19の「ときわコンピテンシー」に対して、前期の履修前時点での学生自身の自己評価により、自記式でレーダーチャートを作成させた。

次に、図2、3のwebシステムを用いて、学生が選択を考えている基盤教育科目の「ときわコンピテンシー」の合計をレーダーチャートとして表示した。

そして、自記式で作成したレーダーチャートと、web上に描出されたレーダーチャートを比較し、学生自身が苦手な部分を伸ばすのか、あるいは逆に得意な部分を伸ばすのか、もしくは全体を底上げするのか、そのためにはどのような科目を履修すれば良いのかなどを、シラバスに記載された19の「ときわコンピテンシー」により40の基盤教育科目の関連性を描画したもの（図4）を活用しつつ、教員と学生の面談により履修指導（支援）を行った<sup>25,26</sup>。なお、指導（支援）後の履修変更の有無は学生自身の判断にゆだねた。

### 3) 2017年度前期の履修登録期間後の「2)」の評価とそれに基づく履修指導（支援）方法の改善

前期の履修指導（支援）終了後、できるだけ期間を空けずに履修指導（支援）で得られた結果をもと

に、履修指導（支援）の方法・内容について教員間でのリフレクションを行った。また、対象学生には前述の質問紙による調査を実施した。履修指導（支援）および質問紙調査で得られた結果に、他大学の履修指導（支援）や学修成果アセスメントの実施例などの調査結果も加味して、履修指導（支援）の具体的な指導（支援）方法について考察し、後期の履修指導（支援）案を作成した。改善点は、①コンピテンシー自己評価のレーダーチャートに、前期から伸びたと思う項目に印を付けてもらい、伸びた理由が何であると思うか、学生自身で振り返りを行ってもらうこと②後期履修科目の登録変更を行うかどうかとその理由を聞くことの2点であった。

### 4) 「3)」に基づく2017年度後期の履修登録期間における「1)」を活用した履修指導（支援）の実施

上述した「2)」と同様の手順で後期の履修登録期間中に履修指導（支援）を行った。前述のとおり、後期の「ときわコンピテンシー」に対する学生自身の自己評価レーダーチャート（自記式）には、前期の面談時から伸びたと思うコンピテンシーに矢印も記入してもらった。面談では前期と同様の履修指導（支援）に加え、自己評価が伸びたコンピテンシーについて、何によってそのコンピテンシー

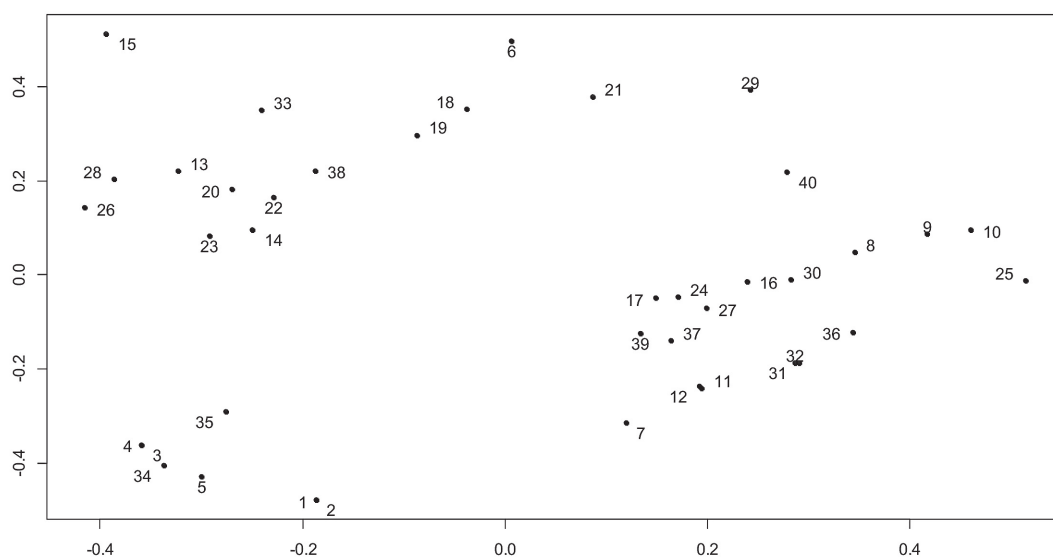


図4 40の基盤教育科目の関連性をシラバスに記載された19の「ときわコンピテンシー」により描画

が伸びたと思うのかも問うた。

その結果、コンピテンシーを伸ばした要因として、学生からはいくつかの基盤科目のほかに、部活、アルバイト、1人暮らしなどの学生生活全般に関わる要因も挙げられた。

#### 5) 2017年度後期の履修登録期間後の「4」の評価

後期の履修指導（支援）終了後、履修指導（支援）の方法・内容や課題などについて再度教員間のリフレクションを行った。

学生による「ときわコンピテンシー」の自己評価は学年末にも再度実施した。

## 2. 履修指導（支援）を受ける学生側の視点：指導（支援）を受けた学生に対する質問紙調査

問1の「あなたは、ときわコンピテンシーがどのようなものか理解できましたか？」については13名から回答が得られ、「全く理解できなかった」と回答した者は1名（7.7%）、「少し理解できなかった」と回答した者は10名（76.9%）、「少し理解できた」と回答した者は2名（15.4%）であった。

問4の「前期の履修ガイダンスの際の面談で、履修を変更したいとおもいましたか？」については13名から回答が得られ、「思わなかった」と回答した者は10名（76.9%）、「思った」と回答した者は3名（23.1%）であった。

問5の「前期の履修ガイダンスの際の面談で、履修を変更しましたか？」については13名から回答が得られ、「変更しなかった」と回答した者は11名（84.6%）、「変更した」と回答した者は2名（15.4%）であった。

問6の「後期の履修登録時に、コンピテンシーをもとに、履修科目を検討してみようと思いませんか？」については12名から回答が得られ、「検討してみようとは思わない」と回答した者は5名（41.7%）、「検討してみようと思う」と回答した者は7名（58.3%）であった。

## 考察

2017年度の新入生を対象に、「基盤教育分野」の履修科目選択にあたって、有志の教員により、履修指導（支援）の方法を構築することを目的に、履修希望科目で修得可能な「ときわコンピテンシー」を可視化して示し、学生による「ときわコンピテンシー」の自己評価と合わせて学生が自ら履修選択について考えることができるような履修指導（支援）の方法の構築ならびに実践を行った。

履修指導（支援）後の教員間のリフレクションにより、本法が正課科目の履修指導（支援）のみならず、準正課・正課外も含む大学生活全般を通じた学生の成長を支援する目的や、カリキュラム評価にも活用できる可能性が示唆された。履修指導（支援）後の履修変更の有無は学生自身の判断にゆだねたが、本法による履修指導（支援）により、学生に対する質問紙調査の結果からも、学生は従来にはないコンピテンシーを意識した学修への動機づけができたという点で意義があったと考えられた。その一方で、それを成し得るための教学面での改善点もいくつか浮かび上がった。

まず、1点目として、履修登録変更の主な要因が、人数制限のある科目の抽選に外れたことであった。そのため、「ときわコンピテンシー」を意識した履修科目の選択が行えなかった可能性が残ってしまったことである。次に2点目として、基盤教育分野の科目全体で修得が期待される「ときわコンピテンシー」に偏りがあるため、学生が修得したいと思う「ときわコンピテンシー」に対応する科目がない場合があった。たとえば、前期開講科目では、「教養」「表現力」「論理的思考力」「知欲」「批判的思考力」「協調性・協働力」「探究力」「省察力」「傾聴力・対話力」「情報力」などを掲げる科目が多くみられる一方、「実行力」「判断力」「継続力」「自己管理力」「専門力」「常識力」を掲げる科目は非常に少ない現状にあることである。さらに、3点目として、「ときわコンピテンシー」について新入生が十全に理解す

る時間を確保できておらず、不完全な理解のまま履修科目の選択をせざるを得ない物理的状況にあったことである。

そこで、「ときわコンピテンシー」に基づく履修指導（支援）方法を構築するにあたって、「①神戸常盤大学における学生のすべての学び（基盤教育分野、専門基礎・専門分野、準正課、正課外を含む）の目標となるように、「ときわコンピテンシー」の内容・数・表現などについて全学的に再検討する」、そして「②上記①をもとに基盤教育科目の再考や、さらには準正課・正課外活動などの位置づけなどを行う」ことが必要であると考えられた。また、コンピテンシーを伸ばした要因として、学生からはいくつかの基盤科目のほかに、部活、アルバイト、1人暮らしなどの学生生活全般に関わる要因も挙げられたことから、正課のみならず、準正課、正課外についても、ときわコンピテンシーとの関連を可視化する必要があると考えられた。

上記のような、本学における「ときわコンピテンシー」に基づく履修指導（支援）方法を構築する際の課題やそれに対する改善策は、本研究を遂行したからこそ明らかになったもので、十全な指導（支援）方法の開発には道半ばであるが、本学において今後「ときわコンピテンシー」に基づく履修指導（支援）方法を構築するための基礎的方向性と枠組み、それを成し得るための教学面での改善点について、ある程度明確にできたと考える。

奇しくも本稿を纏めている2018年に、大学改革に関する重要な文書が相次いで公表された。1つは、5月16日に文部科学省より公表された「大学改革について」<sup>27)</sup>であり、もう1つは、6月19日に日本経済団体連合会から公表された「今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言」<sup>28)</sup>である。前者では、「学修成果の質保証」（“教学マネジメントに係る指針の策定”と“学修成果の可視化と情報公開”）ならびに「教育機能の充実」（“大学・学部間の教員や授業科目のシェアリング”と“[学位プログラム]導入による学部横断的な教育の実施”）が、

一方後者でも、「大学教育の質保証に向けた改革」が真っ先に挙げられ、そのなかで“学修成果の見える化”について同様に明言されている。それ故、今後の大学改革においては、授業満足度および学修到達度などに関わる全学的な教学マネジメントの改善を図りつつ、学修成果の可視化を促進し、実社会において有効・有用・有益な学生のコンピテンシーの開発・獲得につなげていくための効果的・効率的な方略の検討が、今後ますます求められるであろう。このような現状にあって、アクション・リサーチによる実践的教育研究としての本研究においては、いくつかの課題を残しつつも、わが国の大学教育における「コンピテンシー」に基づく履修指導（支援）方法の構築・実践に資するいくつかの知見を提供できたのではないかと考える。

本研究は、平成29年度神戸常盤大学テーマ別研究費の助成を受けて実施した。

本研究の一部は、14th International Workshop on Higher Education Reform (HER)、2017 International Conference on Education, Psychology, and Learning (ICEPL)、23rd International Conference on Teaching, Education & Learning (ICTEL)、高等教育質保証学会第7回大会において発表した。

## 注

注1) 本論文では、『がくしゅう』の表記について、引用文献内で「学習」と表記されているものについてはそのままの表記を残し、それ以外の部分については、平成24年の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」以降、大学教育・高等教育について論述される際に用いられている「学修」と表記した。

## 文献

- 1) 文部科学省. “学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)”. [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2013/05/13/1212958_001.pdf), (参照 2018-04-01).
- 2) 河合塾教育研究開発本部, 朝日新聞社. “学修成果の把握”. Kawaijuku Guideline 2012.11, 25-35. [http://www.keinet.ne.jp/gl/12/11/hiraku\\_1211.pdf](http://www.keinet.ne.jp/gl/12/11/hiraku_1211.pdf), (参照 2018-04-01).
- 3) Barr, R. B. ; Tagg, J. From Teaching to Learning - A New Paradigm for Undergraduate Education. Change: The Magazine of Higher Learning. 1995, 27 (6) , 12-26.
- 4) 中央教育審議会. 教育課程企画特別部会. “次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント(平成28年8月1日(月))”. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1375316\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/___icsFiles/afieldfile/2016/08/02/1375316_1_1.pdf), (参照 2018-04-01).
- 5) 川嶋太津夫. 高等教育のパラダイム転換(シフト)「学士課程教育の構築に向けて」の背景. アルカディア学報(教育学術新聞掲載コラム). 2008, No.325.
- 6) 溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂, 2014, 196p.
- 7) 青木久美子. “コンピテンシーに基づく教育(COMPETENCY-BASED EDUCATION)の可能性”. [https://www.asuka-academy.com/seminar/img/20150130\\_aoki.pdf](https://www.asuka-academy.com/seminar/img/20150130_aoki.pdf), (参照 2018-04-01).
- 8) 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 光成研一郎, 中村忠司, 中田康夫. 教職協働による教学マネジメント改革の理念構築~まなびのre:デザイン~. 神戸常盤大学紀要. 2017, 10, 23-32.
- 9) 桐村豪文, 高松邦彦, 伴仲謙欣, 野田育宏, 光成研一郎, 中田康夫. 基盤教育の設計~教職協働による教学マネジメント改革の成果~. 神戸常盤大学紀要. 2018, 11, 181-192.
- 10) 松尾知明. 21世紀型スキルとは何かーコンピテンシーに基づく教育改革の国際比較. 明石書店, 2015, 286p.
- 11) 青木久美子. 「新しい」大学教育ーコンピテンシーに基づく教育(CBE)の実践. 日本労働研究雑誌. 2017, 687, 37-45.
- 12) 愛媛大学. “愛大学生コンピテンシー”. <https://www.ehime-u.ac.jp/overview/competency/>, (参照 2018-09-10).
- 13) 関西外国語大学. “文部科学省「教育GP」ー8つのコンピテンシーを核とした就業力育成”. [https://www.kansai-gaidai.ac.jp/special/gp/gp2010\\_univ/univ01.html](https://www.kansai-gaidai.ac.jp/special/gp/gp2010_univ/univ01.html), (参照 2018-09-10).
- 14) 関東学園大学. “コンピテンシー育成プログラム”. <http://www.kanto-gakuen.ac.jp/univer/academics/competency.htm>, (参照 2018-09-10).
- 15) 金井壽宏, 楠見孝編. 実践知ーエキスパートの知性. 有斐閣, 2012, 370p.
- 16) 河井亨. 大学教育研究における実践知についての考察ーアクション・リサーチの理論と実践からー. 第23回大学教育研究フォーラム発表論文集. 2017, p.396-397.
- 17) Eliot, J. Action research for educational change. London: Open University Press, 1991, 174p.
- 18) 木村優. 教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティの創造と展開. 教師教育研究. 2012, 5, 265-283.
- 19) ジャスパー, メラニー. ナースのための反省的実践~教育と臨床をむすぶ学びのコア~. 中田康夫, 光成研一郎, 山崎麻由美監訳. ゆみる出版, 2014, p.12-13.
- 20) Norton, L. S. Action research in teaching and

- learning: A practical guide to conducting pedagogical research in universities. London: Routledge, 2009, 286p.
- 21) Schmuck, R. A. (1997) . Practical Action Research for Change. Boston: Allyn & Bacon, 1997, 176p.
- 22) Takamatsu, K.; Murakami, K.; Kirimura, T.; Bannaka, K.; Noda, I.; Mitsunari, K.; Nakata, Y. Web-based Support System for Students to Select Courses using Tokiwa Competencies. 2017 International Conference on Education, Psychology, and Learning (ICEPL). Proceedings. 2017, p.74-80.
- 23) Takamatsu, K.; Murakami, K.; Kirimura, T.; Bannaka, K.; Noda, I.; Yamasaki, M.; Lim, R-J. W.; Mitsunari, K.; Nakamura, T.; Nakata, Y. A new way of visualizing curricula using competencies: Cosine similarity, multidimensional scaling methods, and scatter plotting. 6th International Conference on Data Science and Institutional Research (DSIR) . Proceedings. 2017, p.192-197.
- 24) Takamatsu, K.; Kozaki, Y.; Murakami, K.; Bannaka, K.; Mitsunari, K.; Nakata, Y. New Analysis of Visualization in Eduinformatics using a Network with Parametric and Nonparametric Correlation Coefficients with Threshold. PEOPLE: International Journal of Social Sciences. 2018, 4 (1) , 619-630.
- 25) Nakata, Y.; Matsumoto, E.; Bohgaki, M.; Seki, M.; Imanishi, A.; Kirimura, T.; Bannaka, K.; Noda, I.; Mitsunari, K.; Takamatsu, K. Construction of a Prototype of a Method for Advising Students Regarding Courses Using Competencies. 23rd International Conference on Teaching, Education & Learning (ICTEL) . Proceedings. 2017, GICICTEL1710070.
- 26) Takamatsu, K.; Murakami, K.; Kirimura, T.; Bannaka, K.; Noda, I.; Mitsunari, K.; Nakata, Y. Competency-Based Education in Japan for a Globalized and Knowledge Based Society. 14th International Workshop on Higher Education Reform (HER) . Programme & Book of Abstracts. 2017, p51.
- 27) 文部科学省. “大学改革について（平成30年5月16日）”. <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/jinseil00nen/dai7/siryoushu3.pdf>, (参照 2018-09-01).
- 28) 日本経済団体連合会. “今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言(平成30年6月19日)”. [https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/051\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/051_honbun.pdf), (参照 2018-09-01).